



【2017-08-09】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、  
人生を味わう

今週の雑感

『箇条書き「文化生態学入門」

西山賢一（著）から

人間社会を学ぶ』

長野修二

## 箇条書き「文化生態学入門」から人間社会を学ぶ

---

本書は、2016.07.06「花王」の生き方に学ぶでも紹介しましたが、花王の管理職研修で使用された教材です。

2000年代はじめ、ある雑誌で知り購入して読みました。

もともと、私のような人間には、1回読んだだけでは理解できず、その後十数年間に何度も読み返してきました。

今回、本書の要約を掲載します。

私がつ要約版には、読んだ都度感じたことをメモ書きしており、読んで感じたことが積み上げられています。

自分に必要な本とは、購入したときだけでなく、自らが必要だと感じたときにすぐに引っ張りだして読んでいくものだと感じています。

今また読み返していますが、まさに今の時代を言い当てているかのような記述が沢山あります。

この本の「はじめに」要約されている四項目、第一は、情報化、第二は、環境破壊が進行し、自然の生態系が急速に変容しつつある。第三は、資本主義が新たな段階をむかえている。第四は、生物としての人間のとらえ直しがいま模索されている、については発売から二十数年経ったいまのほうが、現実には起こっている具体的な事象によって、誰にでも理解できるようになっているのかもわかりません。

著者は、同じ件の中で「私たちは自然のなかの存在として、また生きもの（ほ乳類）の一員として、生態学の対象になっている。それとともに慣習や伝統、さまざまなイデオロギーに支配されるような、基礎文化にとらえられた側面を持っているのである。電子情報化は仮想空間の比重を大きくしている。こうして一方で文化を持った存在として、もう一方で生態学の対象として、人間社会をとらえる分野を『文化生態学』とよんでみたい。文化生態学の柱は二つある。そのひとつは熱力学をも含んだ生態学である。もうひとつは歴史学をも含んだ民族学である」

私たちは、西洋文明の流れを受けて国や企業、あるいは家庭などを発展させてきました。

またこれからもその流れの中で国や個人を成長させていくことは間違いないところでしょう。

もちろん、日本的な思考や方法も活かしながら、新たな枠組みを築いて

いくことが必要になると思われませんが、それでも世界的な知の交流の中  
にあって来るべき人類の未来を創造していくことでしょう。

他方、身近な自然は、私たちの知の集約ではなんともならない現象が多  
発しています。

知識としては想像できても、現実の現象はある日突然起こります。

地震は列島各地で発生し、梅雨前線は猛烈な雨を降らせ、台風は予想が  
つかないほど迷走しています。

突然の雨に遭遇すれば、経験したことがない雨量が短時間に降り、たち  
まち川が氾濫を起こし、住民の避難勧告が出されています。

おそらくこのような現象は、現代の知をもってしても予測不能な現象で  
あり、引き続きこれからも続くことになるのでしょう。

本書の内容は、私には何度読んでも理解するのがむずかしいのですが、  
むしろ若い人たちのほうが日常的に簡単に実践しているのかもわかりま  
せん。

他方、多くの固定化された社会、なかんずく企業社会の中だけ生きてい  
る人たちには、動き回ることを忘れ頭をよく使うことで、本書の内容と  
かけ離れたことになっているようにも見えてしまいます。

本書にあるように、「人のくらしを考える分野が経済学」だとすれば、  
企業活動も経済学の観点から展開されることが当たり前だったのでしょ  
う。

そんな中、2000年初頭、花王が管理職研修に本書を採用しているのは、  
「自然のくらしを考えるのが生態学」という、より広範な視点を企業経  
営の中に置き、しかも人間は文化をもち、自然の複雑さをもったものと  
いう観点から企業活動の現実を見直してきたのではないか、と感じてい  
ます。

花王の商品群は、自動車産業のような派手さはありませんが、競争が激  
しい日用品業界の中で着実に成長軌道を登っていることをみるにつけ、  
経営の最前線で研修を受けた人たちが、経営活動の中核にいると思われ  
ます。

専門はもちろん大切ですが、専門を超えて自然を俯瞰しながら経営を考

えてみるということは、遠回りのようですが、企業の継続性の観点からすれば、企業自体が自然の中にある存在であり、先ず人の思考が変わらなければ、企業の行動が変わることもないでしょう。

その点で、本書のような教材を管理職研修に採用することは、短期志向ではできません。

間違いなく長期的（自然を含む営みという複雑で長い時間がかかる）に人の成長があって、はじめて企業の発展が可能となるという前提が必要となり、未来を決める多様性を日常的な風景（個人個人がもつ違った風景）の中にみていくという哲学的な経営姿勢が感じられます。

このようなことを実行できる企業が1社あることすら驚嘆しています。

それでも実際には、他の企業の中にも少しずつ現れてきているようですし、少々稀有壮大な挑戦ですが、やっていかなければ、既存の大企業ほど生存はむずかしくなるのかもわかりません。

直ちに企業の業績に結びつくものでないだけに、物事の本質をどこまで追求することができるかという好奇心と遊び心がなければできない挑戦でしょうか。

[箇条書き「文化生態学入門」から人間と組織を学ぶ](#)

[文化生態学入門 西山 賢一（著）](#)